ツト。

蒼　しょうこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ツト。

【Ｎコード】
Ｎ５６８７Ｅ

【作者名】
蒼　しょうこ

【あらすじ】
なんてことはない、ツトとマコの、二人のある朝の風景。

いつまでもいつまでも続けばいいのに、と思う。
朝４時に目が覚めて、ふと、そう思う。

ホームセンターで買ってきたペンキの缶は、昨日の夜に同居人のツトに開けてもらっていた。
開かなくっていらいらする私を見かねて、貸しなよ、とツトは缶を手に取った。

「はい、開いた」

私がずっと格闘していたものを、数秒で開けてよこす。

「……どうやって開けたの？」
「簡単だよ、これ」
ツトが手に持っていたのは、家の鍵だ。
私も、マイナスドライバーやらペンチやら動員したのになぁ、と思いながらも、感心する。

今日は晴れたいい天気だ。

リビングで布団を抱いて眠るツトをまたいで、ベランダにペンキ缶・ペンキを塗るローラーキット・板・新聞紙を運び出す。

この前板と一緒に買ったスプレーのペンキは、1平方メートルしか塗れないタイプで、板を2枚塗るのが限度だった。

ペンキ缶を開けて、ローラーキットの受け皿に流す。

ペンキなんて高校の学園祭以来だ、と思いながら。

ベランダの壁に新聞紙をガムテープで止める。

板を塗る。

ローラーは凄く使いやすい。あっとゆう間に板を塗り終わった。

板を壁に立てかけて、寝室に戻る。眠気が襲ってきて、1時間寝てしまう。

起きると、片側がちょうど乾いた頃なので、さっき塗った板を裏返して反対側を塗り出す。

リビングでは相変わらずツトが布団を抱いて眠っている。

そのうち彼の携帯が鳴り出す。

ジリリリリ・ジリリリリ。

ある程度鳴ると、彼の手が伸びて携帯を止め、また眠りにつく。

携帯のスヌーズ機能とともに一連の動作を繰り返す。

私は板を塗っては壁に立てかけ、また新しい板を塗っていく。

「なにそれ、ベランダにマコの巣があるみたい。」

ふと気が付くと、いつの間に起きたのか、ツトがこっちを向いて笑っている。

「こっから先は私の陣地だから入ってこないでね！」

なんて返してみる。

「あー、会社行きたくないなぁ」

ツトが誰にともなく呟く。

ぼーっと朝のワイドショーを見ている。

私は板を塗り終わったので、手に付いたペンキを洗い流して、リビングのソファにもたれる。

「昨日さ、ホームセンターの帰り、ガソリンスタンドを見たら車がすごい行列なんだよね。

何かと思ったら、今日からガソリンがまた値上がりするんだね。」

「マグロが食卓から消えるかも、だってさ。」

二人でリビングの床に坐って、そんなことを言い合う。

別に朝食を作る訳でもなく、彼の身支度を手伝う訳でもない。
ただ、二人で寝そべって、テレビに見入る。

「そういえば、ハローワーク行った？」
ツトがテレビ以外の話題を私にふる。

「ううん、行ってない。」

「なんでー？」

「めんどくさかったのー。だってあそこ駅から遠いし。」
正直に答えてみる。

「あー、確かに。あそこ最寄り駅からかなり歩くもんねぇ。」
視線をテレビに戻しながら、ツトが相槌を打つ。
だって、そんなすぐ就職したい訳でもないし。
心の中で呟いてみる。

「さぁ、そろそろ行こうかなー。」

「いってらっしゃい。」

玄関まで彼を見送りに行く。

「もし、このまま働かないつもりならさ、籍入れよっか。」

なんてことはないというように、ツトは言う。

「……。」

「今度一緒に婚姻届もらいに行こうよ。」

そう行って、ツトは扉を開けて出て行った。

いきなりそんなことを言われて、凄くびっくりしている自分がいる。

ツトにとっては何でもないことなのかな。

もうずっと一緒にいるけど、最近は寝るのも別だし、特に恋人らしい会話なんてしてないのに。

でも、そんなもんなのかな？

玄関の前でぼぉっと立っている自分に気づいて、ふと我に帰る。

「今日中にカラーボックスできるかな。」
そう呟いてベランダに戻ろうとする。

がちゃっ。

ふいに玄関の扉が開く。
「どうしたのー？」
ツトが靴を脱いで家に上がるところだった。

「忘れ物。財布どこだっけ？」
ツトがリビングのテーブルを探し始める。
「あ、ここにあるよ。」
雑誌の下から財布を出して、彼に渡す。
「あ、ありがと。」
「いいえー、どういたしまして。」

「今日はどっか行くの？」

ツトが玄関へ向かいがけに声をかける。

「ううん、特にどこも。カラーボックス作っちゃいたいし。」

「そっかー。」

ツトの会話は何だかわからない時がある。

「なんで？」

「いや、お夕飯作るかなーと思って。」

「家で食べたいなら食べたいって言えばいいじゃん。」

笑いながらツトを見ると、ツトもこっちを向いて笑う。

「だって、催促してるみたいだと思って。」

なんだか遠慮がちに言う様がおかしい。

「催促してるじゃん。食べたいものある？」

笑いながら聞くと、

「エビチリ。」

と、答えが返ってきた。

「エビかー、冷凍庫にあったかな。」

そう呟いて、頭の中で作り方を検索してみる。

「できそうならやってみる。」

そう呟くと、ツトは嬉しそうに笑う。

「じゃぁ、早く帰ってくるね！」

そう言って、また、扉を開けて出て行く。

ばっかみたい、食べ物ごときで嬉しくなっちゃって。

いつもツトをそうやってからかうのだけど。

何だか私も、エビチリを食べたくなってきたから不思議だ。

二人でまた、ソファの上じゃなくて、ソファにもたれて食べるんだろうな。

そう思いながら、ベランダへ戻る。

板は、もう綺麗に乾いていた。

ボックスを作ったら、何をいれよう。

きっとツトの、溢れた漫画が入るに違いないけど。

もしかしてスペースが余ったら、この前買ったレシピ本も一緒に入れようかな。

そんなことを思いながら、乾いた板がちゃんと塗れてるかチェックする。

ふと、一枚の板の側面を見ると、小さくペンで何か書いてある。

なんだろう？

じっと目をこらすと、

「ビバ」

ああ、買った店の名前か、と思いながらその店周辺が頭に浮かぶ。

あの店の隣にある、小さな和菓子店の紅白饅頭が頭に浮かぶ。

ばっかみたい。たかが思いつきで結婚なんて。

そう思いながら、自転車の鍵を探す自分がいる。

１０分てところかな。

ツトは饅頭が嫌いだから、饅頭は一人で食べちゃおう。

そう思いながら自転車の車輪が回っていた。

今日は、本当にいい天気だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5687e/

ット。

2010年10月28日04時49分発行